

目指す学校像 かしこく やさしく たくましく ~花と歌と愛にあふれる学校~

重点目標	1 「『個別最適化した学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」による授業改革 2 「認め・褒め・励ます教育」と組織的な体制の充実による、安心・安全な学校の実現 3 スクール・コミュニティでの連携・協働の推進で「地域とともにある学校」の実現 4 自ら学び互いに高め合う教師集団と互いに支え合う同僚性の高い職場の実現
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

学校自己評価							学校運営協議会による評価	
年度目標				年度評価			実施日令和7年 月 日	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	(現状) ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査において、市平均と比較し国語は概ね平均、算数はやや低い。 ○日頃の学習の様子から、自らの興味のあることについて調べ、発表することに意欲的に取り組む児童が多い。 (課題) ○全国調査、市学習状況調査では、国語・算数とも「知識・技能」・基礎問題が市平均よりやや低く、反復・習熟が不十分。 ○国語では「書くこと」に課題があるため、自分の考えを適切に表現することが難しい児童が多いと考えられる。 ○ICTの活用状況に学級差があるので、児童の発達段階に応じつつ、教員の活用力向上を進めていく必要がある。	・『個別最適化した学び』と『協働的な学び』の一体的な充実に向けた、ICTの活用と授業改革 ・基礎学力の定着	①「学びのポイント(じ・し・や・く)」の視点に基づいた授業公開を全教員が年1回以上行う。 ②アンケート等の教育データを活用し、「学びの指標」を基にした指導方法の改善を図る。 ③ICTの効果的活用を目指し、情報共有や実践の共有を行う。	①全教員が視点を明確にした指導案を作成し、年1回以上の授業公開 ②「学びの指標」2回、スクールダッシュボード「授業アンケート」各学期1回実施 ③ICT活用に係る研修を実施、市学習状況調査「ICTを活用した学び」項目が前年度より向上				
2	(現状) ○心と生活のアンケート「自己信頼」項目において、肯定的回答が7割である。 ○R5年度、ケガによる保健室来室者は減少したが、1年生は増加した。 (課題) ○児童一人ひとりの状況を的確に把握し、適切なタイミングで組織的に支援・相談していく体制の構築が必要である。 ○児童が自ら危険を予測したり、回避したりする力をはぐくむことが課題である。	・「認め・褒め・励ます教育」で児童一人ひとりへの細やかな教育支援・相談に向けた校内体制の充実 ・安全な生活の実現に主体的に取り組む児童の育成	①全教育活動を通じ児童のよさに着目した「認め・褒め・励ます教育」を家庭・地域に周知する。 ②アンケートや面談等の記録を蓄積し、児童の状況を把握する。 ③生徒指導と教育相談合同で主催する定例委員会を全教職員で実施し、チーム支援体制を構築する。	①「認め・褒め・励ます教育」を諸会議・各種たより・懇談会等で周知、学校運営協議会での熟議を基に具体的方策を提示 ②心と生活のアンケート「信頼自己」肯定的回答73%以上 ③定例委員会を定期的に開催				
3	(現状) ○コミュニティ・スクールでの重点的取組を「あいさつ」とし、学校運営協議会の熟議に代表委員児童が参加した。 ○市学習状況調査では、地域との関わりに関して肯定的回答が市平均を上回った。 (課題) ○学校運営協議会への児童参加を継続できるようにしていく。 ○保護者から情報発信の方法について改善してほしいという意見が寄せられた。 ○コロナ対応が終わったので、地域や保護者と連携した活動を活性化していきたい。	・コミュニティ・スクールで推進する児童の健全育成 ・家庭や地域との連携・協働による教育活動の展開	①コミュニティ・スクールでの方策を実現するため、学校運営協議会で代表委員児童と委員が話し合う場を設定し、協働した取組を実施する。 ①保護者・地域等が関わる教育活動を全学年の教育課程に位置付け、実施する。 ②様々な教育活動を公開するとともに、デジタルサービスの導入で情報発信方法を改善、学校ホームページの定期的更新を行う。	①学校運営協議会への児童参加 ②学校評価アンケートで家庭・地域との連携に関する項目で肯定的回答90%以上 ①学校・家庭・地域で協働した教育活動の実施 ②各学年学期1回以上の教育活動公開、デジタルサービス導入・活用、学校ホームページ週1回以上更新				
4	(現状) ○教員が学びたい教科を選択する研修スタイルを実施している。 ○経験年数の浅い教職員が多い。 (課題) ○経験値の差をカバーし、学び合う仕組みづくりが求められる。 ○持続可能な働き方を目指し、より働きやすい職場にしていきたいことが課題である。	・自ら学び互いに高め合う教師集団をつくる研修の実施 ・同僚性を高めた働きやすい職場の実現	①学校課題研修は自ら学びたい教科を選択しつつ、メンター・メンティ手法を用いた体制とする。 ②持続的な働き方を推進するため、休憩時間の確保・勤務時間調整・「定時退勤日」を実施する。 ③管理職が率先して教職員の声に耳を傾けて職員室の同僚性を高め、働きやすい職場環境をつくる。	①学校課題研修においてメンター・メンティ体制での研修実施 ②45分休憩を確保する日課表策定、調整による確実な休憩時間の取得、毎週水曜日の定時退勤の実施 ③学校評価アンケート教職員の資質向上、職場環境項目の肯定的回答80%以上				

学力向上に関する取組

安心・安全に関する取組

地域とともにある学校づくりに関する取組

教職員の資質向上に関する取組

令和5年度 学校自己評価システムシート (さいたま市立辻南小学校) 学校番号 101

目指す学校像 進んで学び、心豊かで心身ともにたくましい児童を育成する、花と歌と愛にあふれる学校

重点目標
 1 教育DXによる「学びの自律化と個別最適化そして探求化」による授業改善
 2 「認め、褒め、励ます教育」の実践による、児童の自己肯定感の育成
 3 スクール・コミュニティによる連携・協働の一層の推進と地域とともにある学校の実現
 4 一人ひとりが力を発揮し、自ら学び合う教師集団をつくる教職員研修の充実

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		年度		年度		年度		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
学力向上に関する取組	1	(現状) ○全国学力・学習状況調査や市の学習状況調査において、学習は、全国、市平均と比べ概ね平均に近い結果である。意欲は、国語が高く、算数と理科はやや高い。 ○市学習状況調査において、学習はどの教科も概ね平均に近い。意欲に関する項目は、市平均と比べ国語、社会、G・Sでやや高い。 ○日頃の学習の様子から、自らの興味のあることについて調べ、発表することに意欲的に取り組む児童が多い。 (課題) ○全国学力・学習状況調査、さいたま市学習状況調査の結果分析から、どの教科とも、結果の二極化の傾向がある。特に国語「読むこと」、主に読解力について課題が見られる。 ○ICTの活用状況には学年差があるので、発達段階に応じて活用を進めていく必要がある。	・学びの自律化と個別最適化・探究化に向けた情報端末の活用、授業改善	①「学びのポイント」(じしゃく)を活用した授業研究を各学年が年間3回以上取り組む。 ②共同学習ツールを活用する能力を高めることで、児童が自ら考え、伝え合い、学びを深める「主体的・対話的で深い学び」を実践する。 ③全国及び市の学習状況調査の最新の結果を基に、読解力に関する状況を分析するとともに、市教委による学力向上カウンセリング研修を受けることで、より効果的な手立てを設定し、学校全体で児童の読解力向上を図る。	①全教員が「深い学びのポイント」を明確にした指導案を作成することができたか。 ②児童が共同学習ツールを可能な限り活用し、学習の成果を互いに共有し、学び合うことができる活動の場を意図的に設定したか。 ③調査結果の分析結果や学力向上カウンセリング研修を踏まえ、授業改善の視点、手立てを学年ごとに設定することができたか。また、読解力に関する問題について、正答率を前年度より上回ることができたか。	①全教員が「学びのポイント」を活用し「深い学びポイント」を明確にした指導案を作成し、公開授業を実施した。 ②高学年では、全教科でICT機器を活用し、共同学習ツール等を使っての学び合いを実施した。低・中学年では学級差があるが、担任ができる限り活用していた。 ③7/6 学力向上カウンセリング研修を実施、2学期に今年度の全国調査結果分析を基に、学力向上サポートフォーリオの中間見直しの方策を教職員で確認した。読解力については、前年度より向上した項目はあるが、資料からの読み取りや比較分析に課題があった。	B	・「学びのポイント」(じしゃく)を活用した授業研究は、教員から希望があったので、継続していく。「研修の振り返り」では、学校としての「深い学び」に到達した児童像が構築されるとよいとの課題が上がったので、次年度は全体研修の中でまとめていく。 ・ICT活用の学級差に対応するよう、項目4「教職員の資質向上に関する取組」と関連し、研修の機会を活用して教員の活用能力を高め、授業力向上を図る。
		(現状) ○児童の心と生活のアンケート「自己信頼」の項目において、肯定的回答が5割を下回っている。 ○昨年度、校舎内では教室でのけがが多く、高学年より低中学年でのけがが多かった。医療機関を受診したけがは33件であった。 (課題) ○感染症対策の緩和による生活の変化や、人間関係の希薄化等によるストレスや不透明感が児童の心身に与える影響が大きいことから、今後、児童一人ひとりの状況を的確に把握し、適切なタイミングで組織的に支援・相談していく体制、仕組みづくりが課題である。 ○教職員による施設設備の安全点検を確実に行うだけでなく、児童が自ら危険を予測したり、回避したりする力をはぐくむことが課題である。	・児童一人ひとりへの細やかな教育支援・相談に向けた校内体制の充実	①全教育活動を通じて、児童のよさに着目した「認め・褒め・励ます」教育について学校・家庭・地域に周知し、実施する。 ②情報端末を活用して児童向けアンケートや面談等の記録を蓄積し、児童一人ひとりの状況を継続的に把握できるようにする。 ③教育支援・相談に係る校内委員会でICTを活用することで、蓄積した情報を基に児童の状況を細やかに把握、分析し、適切なタイミングで組織的に支援、相談を行う。	①「認め・褒め・励ます」教育について諸会議や校長室だより、学校だより、懇談会等で周知し、学校運営協議会での熟議を基に具体的方策を示したか。 ②学校自己評価に係る児童アンケート、保護者アンケートにおいて、関連する項目の肯定的な回答の割合が90%以上となったか。 ③児童のアンケート結果に基づき面談の結果確認から2週間以内に行い、生徒指導・教育相談、関係の分掌組織で情報を共有し、適切に対応できたか。	①「認め・褒め・励ます」教育について諸会議や学校だより等で取り上げた。 ②自己肯定感、心と生活のアンケート結果で、肯定的な回答がR4の44%→R5は70%となった。 ③面談だけでなく、気になる児童の様子は毎月定例委員会以外でも常に関係者と情報共有した。担任一人が抱えることのないよう、児童・保護者の面談や連絡に管理職が関わったり、専科教員やスクールアシスタントが指導補助に入ったりした。外部の機関を交えたケース会議等も実施し、未対応0に努めた。	B	・「認め・褒め・励ます」教育について、学校評価保護者記述で教員の指導や話し方が高圧的との指摘もあった。教職員へコーチング研修を行い、効果的で子どもに寄り添った指導ができるようにしていく。 ・担任を補助したり、配慮を要する児童に対応したりするなどの、引き続きスクールアシスタント等の配置に努めるとともに、学年・校務分掌組織・管理職が連携し、組織的に対応していく。
		(現状) ○昨年度までの学校運営協議会での熟議によって、目指す児童の姿「児童の自己肯定感を高め、様々なことにチャレンジする意欲をはぐくむこと」に地域全体で取り組んでいくことを「アクションプラン」にまとめ、共有した。 ○市学習状況調査では、地域との関わりに関して肯定的な回答が市平均を上回っている。 (課題) ○児童の心と生活のアンケートの「信頼自己」の結果から、児童が参加する地域の活動でも、一層の自己肯定感の向上を図る必要がある。 ○昨年度実施した「あいさつ運動」については、保護者や地域の関わりが十分とは言えなかった。 ○「アクションプラン」について、継続的な行動に向け、前年度の取組を確認し修正を加えていく必要がある。	・地域との連携・協働による、自己肯定感を醸成する教育活動の展開	①地域人材や保護者などの多様な人物が、児童に対して積極的に関わる教育活動を各学年の教育課程に位置付ける。 ②5・6年のグリーンタイムで地域課題を題材とした探究的な学習を、外部人材を活用して実施する。	①学校自己評価に係る児童アンケートで自己肯定感に関する項目に肯定的な回答が90%以上となったか。 ②学校自己評価に係る教員アンケートで家庭・地域との連携に関する項目で肯定的な回答をする割合が90%以上となったか。	①地域人材や保護者が関わる活動が全学年で実施できた。 ②学校評価教員回答は、連携について肯定的な評価100%であったが、保護者は94%でエコフェスタ中止に関する記述があった。	B	・外部講師を招聘したり発表会を開催したりする活動は、授業時数との兼ね合いを考慮して実施した。効果的に多様な人材が関わる事ができるよう、今年度の取組を基に、次年度の計画を工夫していく。
		(現状) ○学びのスタイルの中心となる、情報端末をはじめとしたICTの活用方法について、エヴァンジェリストが中心となり研修を重ねてきた。 ○高学年での教科担任制実施により、担当する教科について、より深い教材研究を行うことができる。 (課題) ○ICTの活用について、教員間で取組の差が見られる。誰もが学び続けることができる職場環境づくりが求められる。 ○若手とベテランの二極化の年齢構成のため、年齢層を超えて学び合う仕組みづくりが求められる。	・一人ひとりが力を発揮し、自ら学び合う教師集団をつくる研修の実施	①教職員集団で協力して資質を高めるため、学校課題研修はメンター・メンティ手法を用いた体制とする。 ②一人ひとりの教員が年間を通して取り組む授業改善を目指し、ICTを活用した年間3回公開授業を実施する。 ③1/24の研究発表会やTeamsを活用して、優れた取組に関する資料や短時間の動画データを蓄積、共有し、事例を本市へ発信・共有する。	①学校課題研修で、メンター・メンティ手法を用いた体制で研修が実施できたか。 ②全ての教員が、年間を通して取り組む授業改善を目指し、ICTを活用した年間3回公開授業を実施することができたか。 ③1/24 研究発表会で、本校の教育実践について資料やデータをまとめ、発信することができたか。Teamsのデータを活用し、教員が授業改善に役立てられる状態になったか。	①研修主任に指示し、教員が希望した教科グループを、メンター・メンティを考慮して組み合わせ、指導者の指導を受けながら研究授業の指導案検討を行い、研究発表会分科会で研究協議を実施した。 ②全てのICT機器を活用した教員が公開授業を年3回実施した。 ③研究主任が中心となって各教科グループで今年度の授業実践報告書と成果報告書を作成し、効果的であった手立て、成果と課題を共有して次年度につなげる研修を3/7に実施する。	A	・今年度の研修の振り返りを基に、ICTを活用した「学びのポイント」の視点に基づく授業改善を研究テーマに、教員が主体的に学び合う研修を3年計画で実施する。 ・SSSP等、新しい取組が始まるので、研修でまず教員が使用し、実践を報告する場を設定することで、できるだけ学級差が生じないようにしてICT活用を推進していく。 ・学校評価保護者記述に教職員の心身の健康と心の余裕に言及したものがあつたので、次年度は勤務時間と日課表を見直し、教職員の勤務状況の改善に向けた取組を進める。

学校運営協議会による評価

実施日令和6年2月14日

学校運営協議会からの意見・要望・評価等

学力向上に関する取組

安心・安全に関する取組

地域とともにある学校づくりに関する取組

教職員の資質向上に関する取組